櫻齋房種畫
岡本勘造經
四編下
島鮮堂壽梓
芳川俊雄閲
四編中
東京奇聞
四編上

芳川俊雄閲
洪水高橋毒婦の小伴
東京奇聞
四編上

A466
10

櫻木小詩篇と題して芳名を後世に留めゝ夫い高徳忠士の赤心是ハ高橋毒婦の小傳同じく四編を櫻木ハ鏤めて其醜行と末代ハ殘ゝ隋珠を以て雀を彈くの嘆たきこと也のふねど書肆の需めに辞するを得ず三編綴て一服と烟草休憩さゝ為催促四編の序文を急ぐまゝに島鮮堂の店前で矢立の筆をかゝゆるして「自然校正成むやゝにならんと勿也時々誤謬なきにしもあらず」と書付て与へしゝ亦店主への忠告にこそ

明治十二年三月上旬

岡本紀泉題

高橋お傳
根町三丁目谷住
倉川平吉

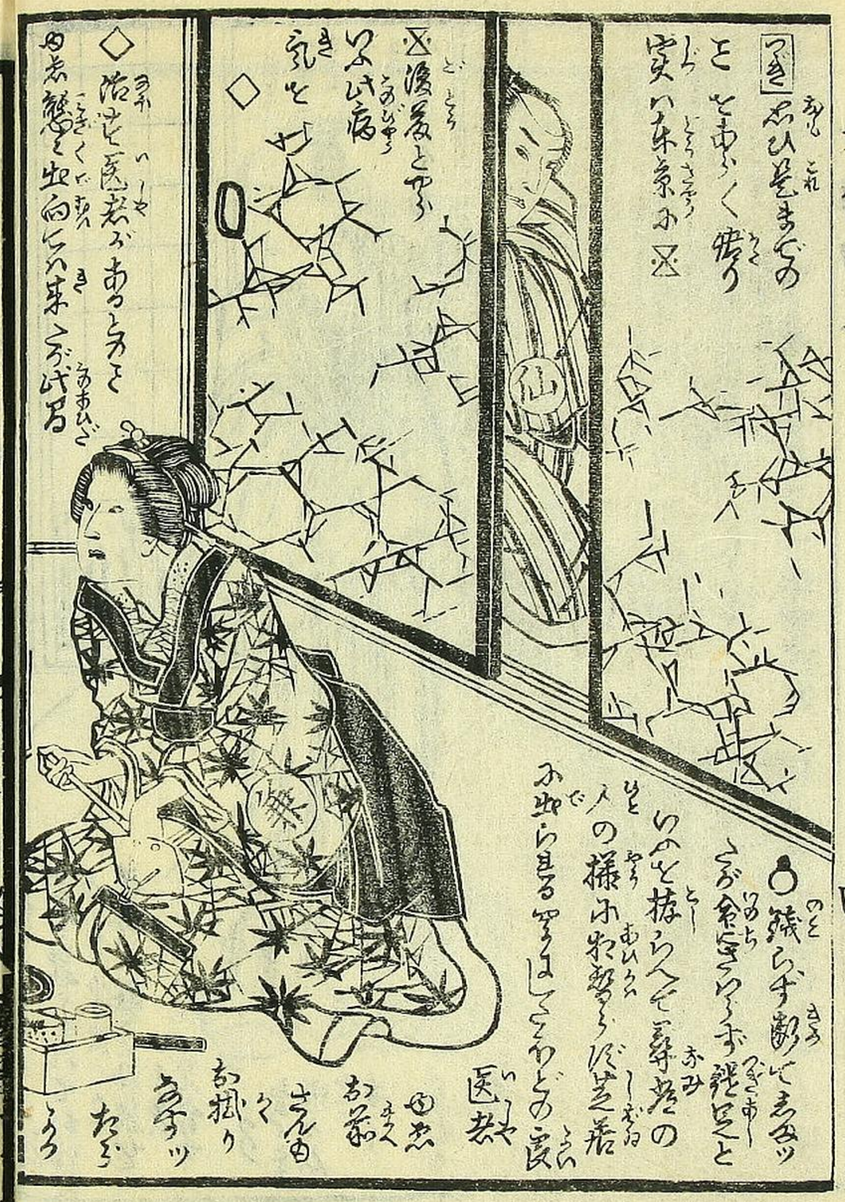
小川市太郎

○去程ホ侍ハ初めて本心を表し ▼ 弓馬所なる武藤左衛門方へ止宿
松高と味方ホうち入り丼〻縁つく 世が西も東も知らねば
悲人ある室岩和尚へ罪とも也甘々と 聞者を探すと云ひにらん
金五十両を奪ひ上いまゞ田舎ホ 日毎ホ侍方を出歩好て
落付んや松高が勧め不同意二所に 元和五の三日を送る頃
東京へ出立し又も何とゝまんと 志の者を作らんと千々
思ひ切まうぶ松高が同志侍の内 ホひと擬くのを
の上ホ臣ホ原田要蔵の事を明せ〻ら にて 次へ
日頃の恩を忘れ臣のゝ共ホ悪ゐと
乗べき男ホあらぬと思ひ怒ゝ縁ツ
て押〻ぶけ兵慮と拵へて波之
助と引〻れ逢を東京へ
仮りつき ▼

48-1955

つゞき 波之助の病気ハ情ゆゑ妻ゑう
恨む病ハあらねば終日宿屋の奥二階に
寝ころびあきたり
徒然を慰め兼る
次の間ハ
ゆて
商用
※中年男ハ
仙之助が横浜ハ
田舎の者

田舎と
女を
伴ひ
❶尋ぬるハ男ハ南山仙之助とて
の中ゆゑ
寄の丁人ゑて女ハ青木おかよとて年四五の※
止宿させ
夫婦ハ朝夕ハ旅を
会ず
或日のことあ
遊ん
安く
波之助の病気の様子ハ問へ人来
きて病気の様子ハ問慰さめ
波之助も生親切を嬉しく
次へ


仙
◇治世医者があるとあて
四方熊と虫向にハ来こがれる
◇
※浪花とやう
いふ病
気と
医者
四方
熊
さん
白く
ハ拙り
ちゃッ
ちゃ
ろう
○鐵らず鬱して志ッ
こが余ちゃ〜ず鐵ちと
いのと梅らへで尋者の
人の様ハ和ろ〜ハ芝居
ハ出ら見るやうはしてきわどい表

かゝ女房のお酒ぶ毎日のやうに
尋ねても田舎と遠あてゆ」も
分らぬとハ大変人ハ秋
され〜事ぢゃんとの
〜ふお義四郎の
毒にあひ医者
といへば私のある
横浜にハヘボンさんと
て異人の大先生ぢ
ある此人ハ西〜ハ
いふ病者の脱疽と
やふいふ病をと療
治して見せるの
らうと
出せ
ハ人
酒が
ろう
事まされ
ば気楽い
尚も
吐しを
して和云
やう袖すり
あるも学ぶの
繁ろう
次へ

つぎ

隣り住宅は彩しく
みるも仰ぐの出縁雅に私の
異母の妹に
お前さんと
年格合も
丁度同じ
位で

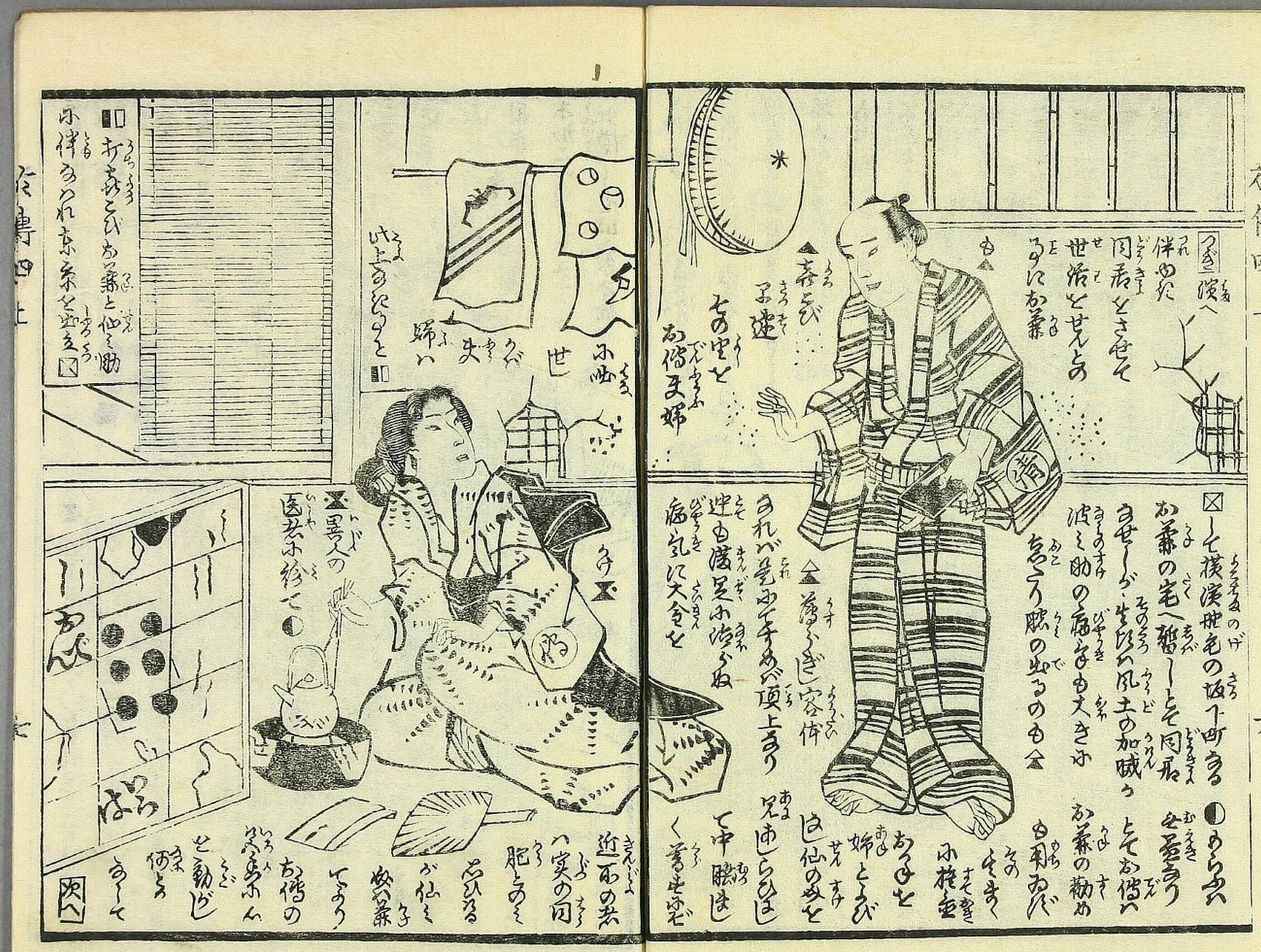
名前も美張
かぐんといふがあり
まりあるが細あて
私は十一の岡田舎うぶ

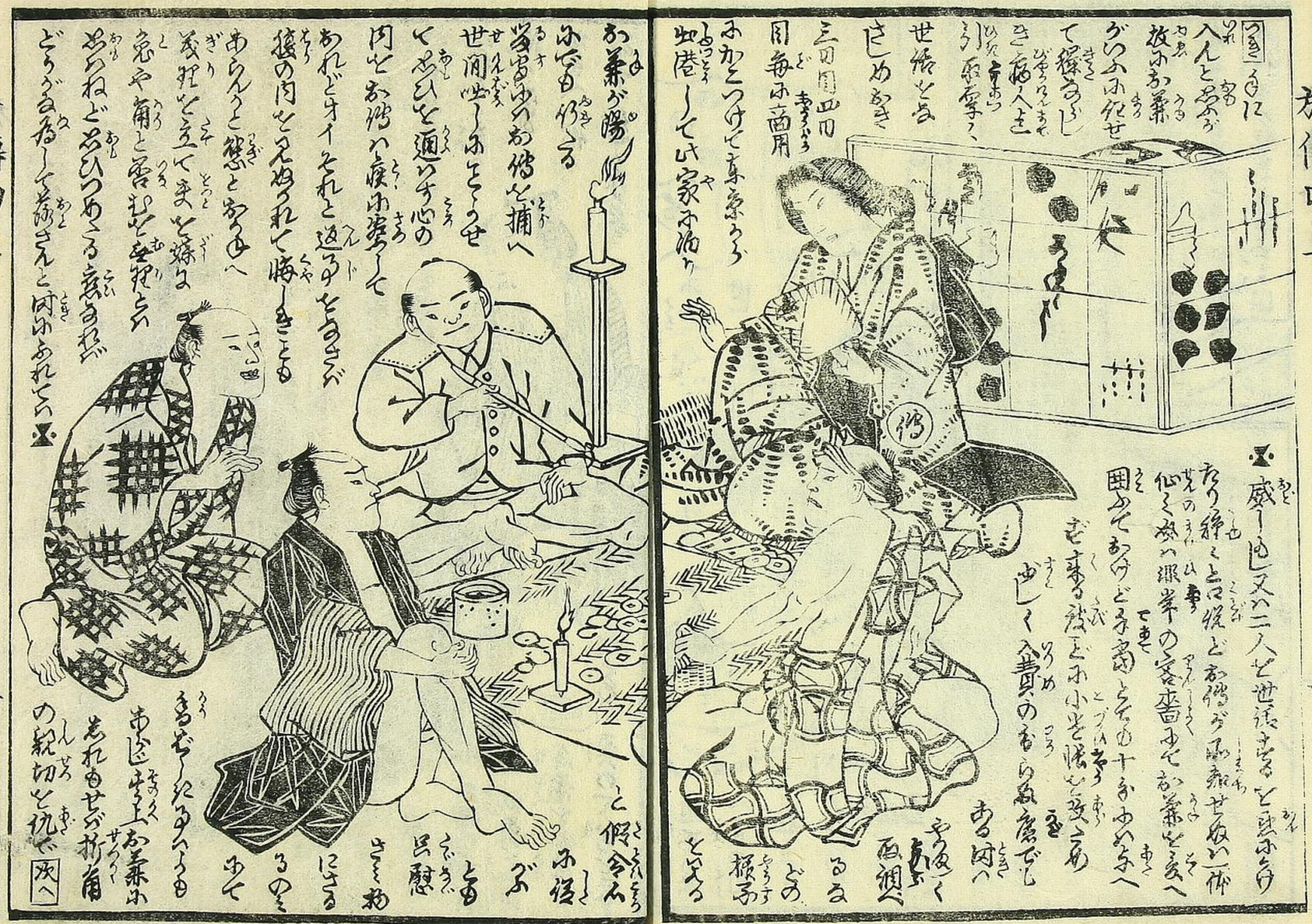
ほうとつけこむ以前中ぐ
社会の出入とまるこびが次の
君の仙と助かが彼を忘れく
忘れ義がゆいんあるを海
慶応を夫と
推量り仰ぐ
仕事の稼が
自ぶんとも
自駒が妻
と過ぶ作せの
遇う模様

此地へ出く生後作りをせぬ
自分今のでうしてみるやう知ねど
何とまく嫌のやうでありまして
ちふんとみると此る私の五形
もの影人とあるの毒が
ちんぐりうへボン先生
が加けて
廉治と
あさせし
といふて
みまして
云の私を仙らんとちふ折まて先方
うう妹のちふぶとまで祝切がいふと

市ま事が知ないかれど
用自為く毒を
廉治をあめが

しと在西へ行ると
残念ぐ生医者がる
が出来まの色裏と喋くゆど


つぎ
俵へ
伴四郎
同吾と
世話とせんと
のるにお兼
奈良
子迷
なの宝と
お俗夫婦
して撲滅地の坂下町
お兼の宅へ暫くとて同吾
ものしり生れい風土の加賊
波く助の病名も大きい
ちゃうり賜の如るのも
お兼の勧め
お俗
姉とよび
仙の妻と
あれば見ゆて手ぬぐい頂上より
足はらひは
迷は濃足ふ治らぬ
病気に大金を
中賜は
く言せぶ
近所の去
八実の同
肥とのこ
ちゃうる
が仙
妙兼
てゆう
お俗の
ふん
と動じ
俗ろ
ゆて
世
ふ西
夫
婦い
ぬ
お兼と仙く助
伴ゆれ京糸を
婦人の
医去ふ修で



つぎに入れとあるは故のお菓ゞのふは紙せて猫ゝ[illegible]き猫入を引取事ゝ世話とさしめあきさ三月四月毎ゝ商用ゝかこつけて来客ゝ如陪して此家ゝ泊り

威一色又は二人ゞ世話をするゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ仙くゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

つぎ 迎ーて代後の俤りと先ごとあるあうんと
あへば何あまでもお兼と姉と
呼び合ひ嬉しくあて
遅々ゆ愚痴とあ
ちゆまちとあ
ゆしも仙の妙めこ云まゆ後ゆ
今の仙こ妙めこんの迎こが引き
知ていろきで世話ーてあくと
俗ま兄ゆ如何ゆもーと遅知ー
ゆれんと交ろう
稚ゆゆゆを
かまへ人お俗が
あゆろ兄ゆこ来

❶かるると屋ひ出兼の
世話で因ゆ
六田町二丁目ゆ人足
宿を
出る
青盃
清兵衛
方へ引
後ひが
お俗ひゆ伝
細あつくゆ付
爺蕃とお辰と
英の一下ろと二番
改こあ

ゆこあ兼ゆ二人へ毒の毒
にあひ仙こ妙が東京へ呼ひ出
すゆお俗夫婦へ仙こ妙の毒笑を伝ひ
呼ひ落こあ人こん狂言外へ出ごへこあこる
がこあれど私のこゆ知ろいゆけこが代後
とこあれ知ろず因幡伝田又ひゆ自宅も
ゆろひひれ後とひこえこあゆゆ伝い
ひ人妻
ゆ兼
く❶
宿
止
宿
ゆと
妙
ど外
ゆ知ひゆく又
立流ゆ

ゆろ彼を屏風で仕切て
客人の夜ゆ備うけあを
るゆゆく日を送ひ出者や
へゆ石屋搬ごの人足や
宿ゆ宝めぬ
彼商戸ゆ日々大皆入
こんでさ日ゆ元こ笑
残でこ夜俗ふす

次へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東京區分繪圖全 鹿兒島紀事 六冊 切
命之養生善惡鏡全 獸類一覽かるた
其名も高橋毒婦の小傳 東京奇聞 初編 追々出版 彩色入小本數品
御所櫻梅松錄 十五編 俳優忠臣藏折本
大功記銘々傳 四冊 新板双六類品々
亀 地錦 本繪 問屋
糀町区一番丁廿七番地 編輯人 岡本勘造
浅草區瓦町十二番地 出板人 綱島亀吉

010190510765

四編中

A464

宝名水言伝
毒婦の小伝
東京奇写
四編中巻

十門園
をの市橋
所種画

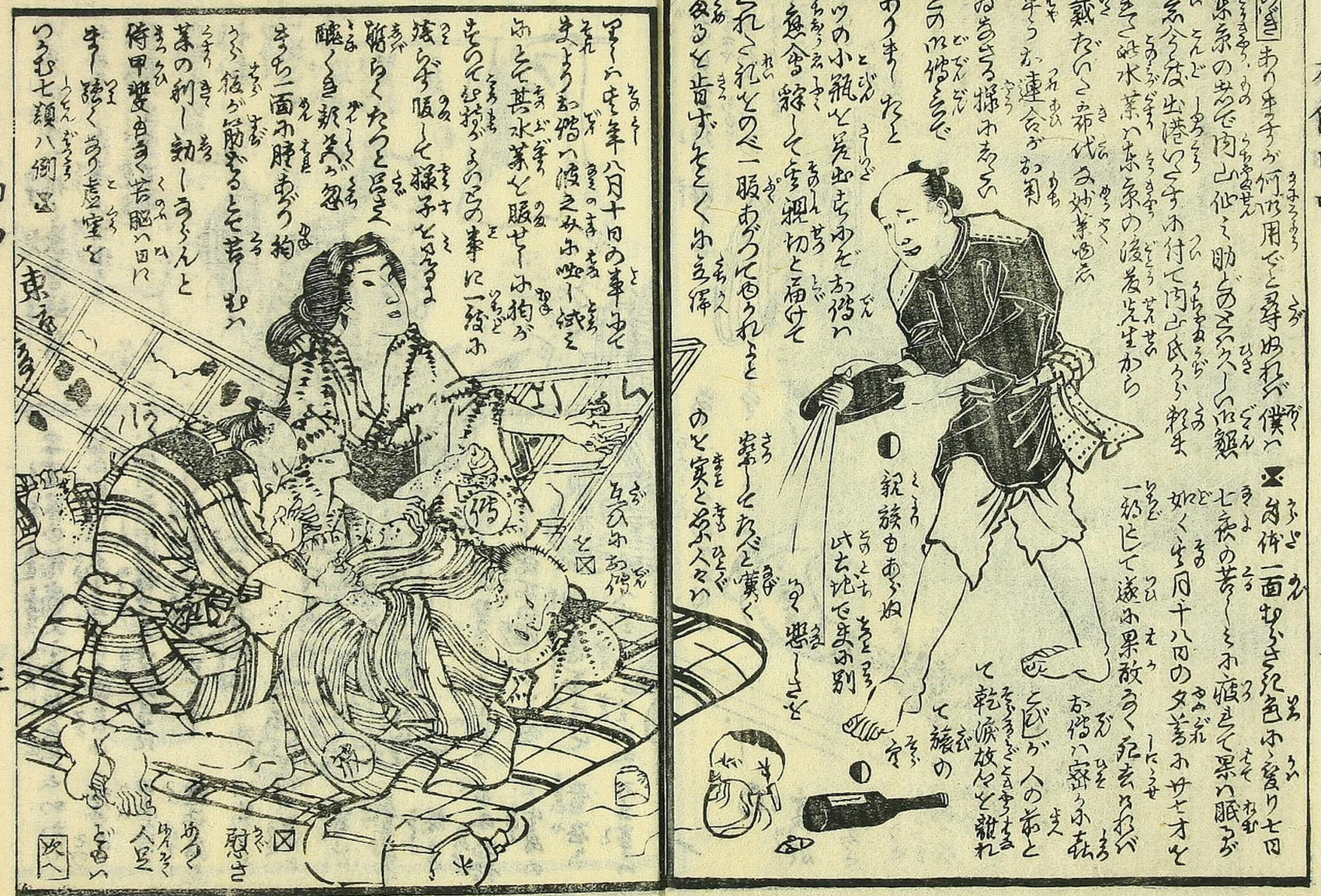
為鮮老稗

上の巻よりつゞき

48-7956

武

東京奇
波



[illegible]あり牛子ぶ何ぢ用でと尋ぬれば僕い身体一面むらさき紅色ふ変り七日七夜の苦〜しみ痛さて果い眠ぶ如く生月十八日の夕暮ふサセオを一級上て遠ふ果敢ふく死去なれば

お偉い密ふ去

こび[illegible]が人の前とて乾涙故ゆと離れて旗の

紀族もあぶ姐

此去地で実ふ別

悪〜さを

東京の出で肉山仙こ助とあ[illegible]久しい品銀

京今度出港ひすふ付て肉山氏ふ彩生

生て姓水菓ふ赤京の後義先生から

戴だいと帝代ふ妙薬西云

早ふ連合ぶ お用

ねあふる採ふ[illegible]

[illegible]の仙[illegible]

あり[illegible]

一ツの小瓶と[illegible]出ふ[illegible]

一遍舎綜して[illegible]切と届けて

[illegible]と礼とのべ一服あづけてあれと

[illegible]と昔ずそとくふ立俗

のと実と[illegible]人さい

[illegible]年八月十日の事ふて

[illegible]より[illegible]仙い彼之ふ[illegible]紙と

[illegible]甚水菓と服せ[illegible]拘ぶ

[illegible]の事に一段ふ

[illegible]服して[illegible]

[illegible]らく[illegible]と[illegible]

[illegible]く新笑ぶ忽

[illegible]一面ふ腫あぶり拘

[illegible]筋ぶると苦〜しい

菓の利〜効〜うんと

侍甲斐白く苦脳い四に

[illegible]く[illegible]室を

つゑむ七頭八例

慰さ

人足

[illegible]

つゞき
仕事を休と是ある姉ぬの
たゞあること寺の世話ゝ
取立の支度万端
と取とのひ
その実疾
一同ゐて
通疾と臣
賀郎
たやく
▲冨士の指南人小澤伊兵衛
◎かけ
その
たゞ
甲斐文
遂ゐ病死
◎
虚と
実と
取まぜて
淡ゝ
◎
澤ゝ
ゐ物語
ゐ生涯の
省度ゐ
ゐる事い
◎円ゐた田清
水ゐの赤紙寺と
いふ寺へ墓ぐり取立を
良器法士と変て七日くの
供養もんたゝりに
瀬せゝしゞ右偽も
今ハ悔ゐの左衛臣
とゐるゝうんを
六世と送らんとゐふ彩
一日月達ゐ安さ途
中かけて在所ゞ
迫つゞきゐる上世
在所の
祝達の
様ゐと
尋ねに
伊兵衛
女性奴隷
男の女ゐ
あふぢと
ゐく
怒と熱
傷の体

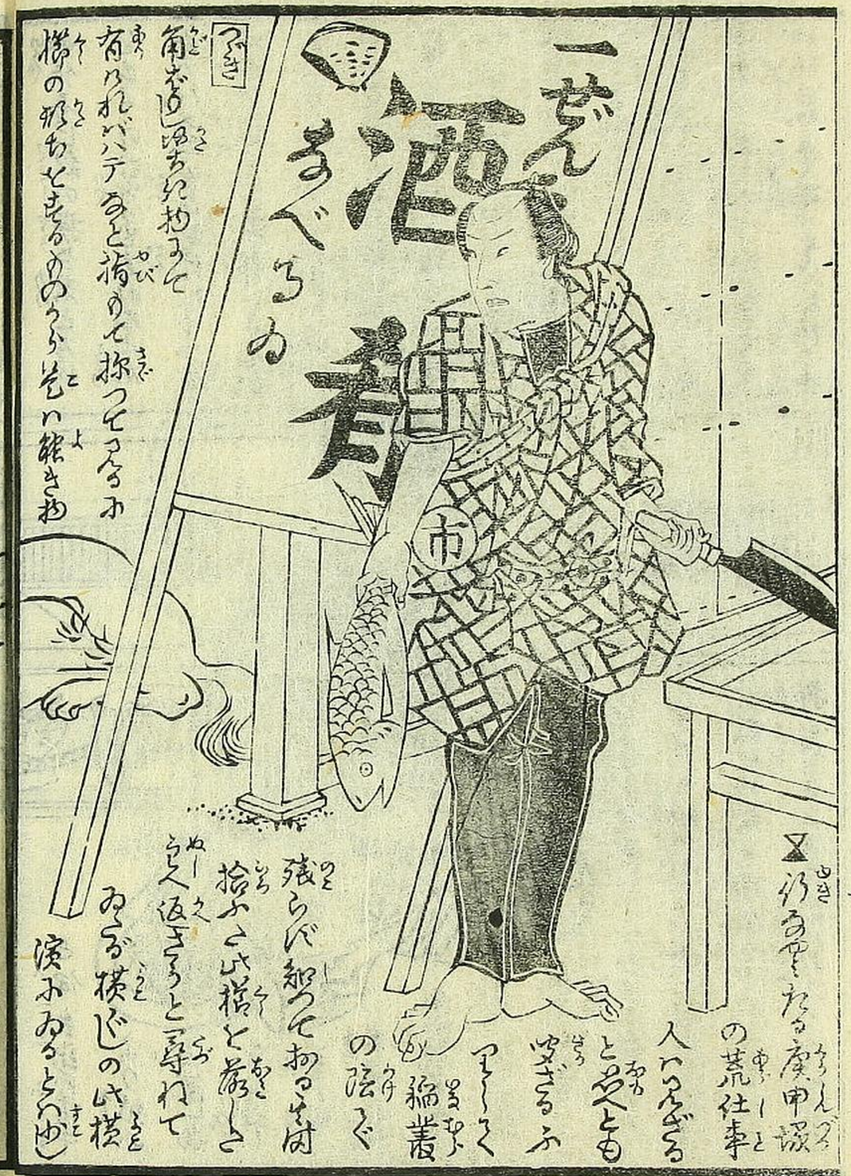
つゞき　波之助の
悔しんのゝ涙の
恥れ遊ハ二人の
仇敵と知ッタ
波浪の如ごとが
亡魂ハ私と
一人ぢゃ
ゆめるとも
益なれば一旦在所へ
帰り親達へも安心させ
たぶよろしくうん妻ひ私も
近々迎ひ参ら一所に仇と

▲うまうて父九右衛門ハ新しの滝の
海やうふしそ下され宝ハ待りの
事まぐれ此ハ待て
居りますと浮さ
るなぞ
ざれが伊之助
様々云ふと
久辞ハまぎ
らす情
候をハ待
いつまハ矢女めう
ちをゝ心腹し

如何ハ己私の捕ハ者と名ハ
とそるのハ者ハ者ハ
ありげ己一云ハ仇ハ
此奴と欲しそ常曙と
仇の肉ハ爪ハ
日数ハ
急ぐ見ハ
むきあせと矢女ぐ
ハ
と慧と暁ハ
ちと匹ハ
父と欲むき逃亡ハ
ハ今ハ一人で
ハ仇の華ハ

と伊一云ハ
より紙ハ
色ハ
とれハ
見ハ
末ハ
ハ逃ハ
うら人の
内ハ
ハ
ハ

伊
偽


一ぢん酒肴
まべらの
市

恵比寿はく
稼の
宿りの信然
不寿婦と
夫に捨て
夫の
本心を
契りて
宿の稼を
共に乗
夕
引取
稼者
商ひの
十月末
伊勢参宮
果てより
忘れ角
東京
一係芸妓
ゆて
稼ぎ住所
ん
仲間の
稼人宿
秋元安芸方
宿とり
つき人
伊勢参宮
白山
浮世
方山の
ゆて
百礼
容
俄に浮
酒と
伊勢参宮
酒の

つゞき

お傳と己が妻とのひ白ゐるゞ傳ふ
出来りと拾ひ物を拾ひ散ふのゝ生田と
送りしが伊兵衛ゐ家ゐ家ゐ男ふあゝねば
毒婦と長く彩〜

乃治七年六月

稀丈稼業

て有ゝが逃ゆ内
の災害と拾くと ほのあらんとゑへが
ゆく手と切り手ぞるこゝ〜ゐれと
俄ゐ家ゐ男の出来〜横ふ面拾ひ
お傳を家ふ殘〜お紀一寸在更立返
ゆ元ゆ元に遅くも来月又も
出来おさんとふと好幻る
ふ長毒婦のお傳い
ゆ〜も伊兵衛のんとん

牧村へ

傳ていそ
又丸ゆ
ふ海さんと
んとさゞあ
る海りく の稼
庄で家〜

七

ゐき散々人を慰さんで
ゆ傳ふのそりゐもべき
弥ふ大ゐとゝゝ
ゐき

伊兵衛
銀を引ゐゆ内の悪ゐ
と人よ傳るゐ付られば一所に
ゆ元ゐゆ途中ゆて又ゐゐ
ゐあらんとて外西い悪業ふ
事とゝ一所ふ旅ゐ

傳

ゆ傳
家ゐ
出ゐ
と宮

せーゞ

むゞちみゞ
徳ゐ
と傳
と二人
お家
の分
車と
廣ふて
東京を
出ゐ中山
と宮
急ぎられ

○家ふ又お傳

つゞき

つゞき
伊吉郎が
止宿せし
紋元寺
者が近所なる
神田猿楽町ハ
一揆地と唱ハ
世ハ
慶應
山の
石川
※甚三郎

東京區分繪圖全
命之養生善惡鏡全
獸類一覽かるた
其名も高橋毒婦の小傳 東京奇聞 初編コリ追々出版
粉色入小本數品
御所櫻梅松錄 十五編
忠臣藏折本
大功記銘々傳 四冊
新板双六類品々
地本錦繪 問屋
龜
糀町区一番丁廿七番地
編輯人 岡本勘造
浅草區瓦町十二番地
出板人 綱島亀吉

010190510773

櫻齋房種畫
岡本勘造綴
四編下
島鮮堂壽梓

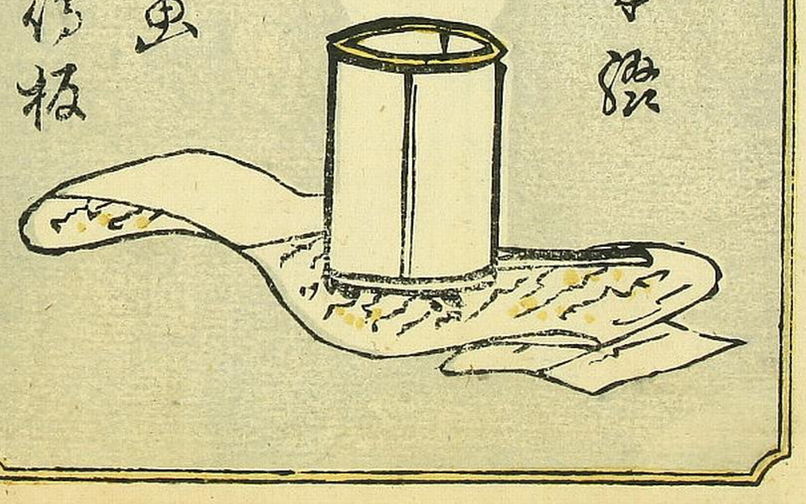
A464
12

十川写真の本領

高名な写真師の小伝

東京寄席

四番人の下



廣瀬清板

中巻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

清和の八月十九日の夕暮れを待
ちかねて急ぐ市右衛門夕涼の中の東
へ東へと行くに四日の昼の暑さと藪で車
夫を休ませ又も挽出し戸田川を渡りて
向へ行き夜もあけて休憩
なさんとて右の方に見る花菖蒲の
夜風に戦ぐ葉のもとに
一人の乞食の
横たはる一筋路
車の来るを待
大の男が三四人草
かゞやかして飛出す伊勢和さびたる方も数多
車を停めて何ふ逃去りて影もなし
と市右衛門

車とまりて用
心する間なく
出る
草の
中から
ノッソリ出る一人
の女髪もあらず
ふるめかしく
ら深く武蔵へ
逃さるる
ゆゑ事
知る者

怪女奴と云へ
つゆ手提灯の火影
ゆゑ待ちかねれば
思ひ

如何に仲丁の行方を
止めよ
と俗と云る娘
娜和みて暴
市右衛門兎のこと
で行方知へ入去る
男は
男はて猶り
なる死の次第も
なるに死孔
東中
あい伊勢
ようモレ
ふぐ
せんろ

次へ

つゞき

こんな所へと尋ねる新とらがあるかゝい城しきを西指ゆんす、そう作者い市さんろ爲々面白おかしいことを仮設をするのハ今ゝ物語りもの面白かりけるほ〜とのを声音さへ誘つゝと聴しれ猴子のあくぎるハ不審なるゆと市右衛ゞ雪も保姉と尋ねるに御偖い頻りハ涙を拭ひ問てゆきを紙つゝの通り私い文〜く家居の伊兵衛さんの世話ハうり今爰

途方ハ

東海へ行る車ゞ久〜

あるゝぶ業とれとひ西去遠者と知ゞず生車へ

の事と近部じやとのめて

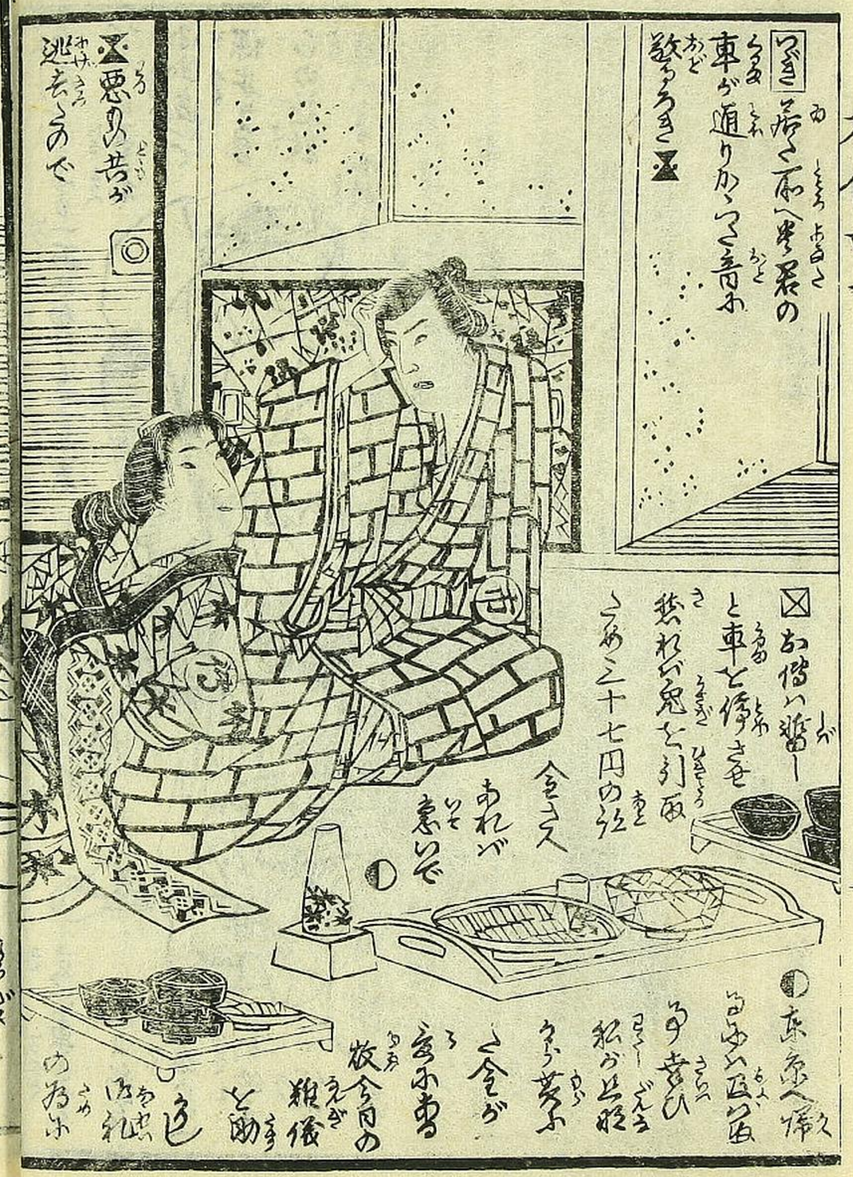
あゝれの為ハ所へ捜ゞ

を次へ来

為ゝ

ゝ

ゝ



つぎ 若さ者へ半若の車が通りかゝつて音あゞ敷ちろき

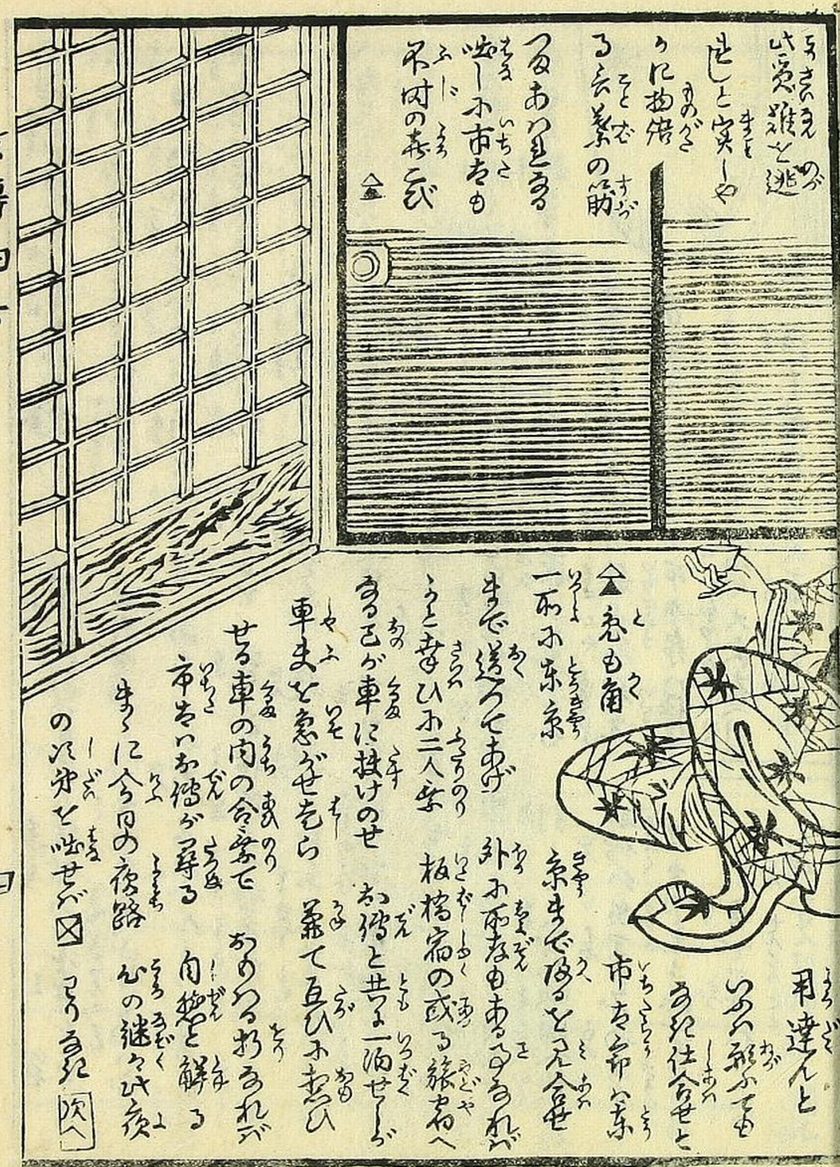
悪男共が逃去るので

お偉い番一と車と停さを然れば鬼と引取こゝ二十七円の位

金ゝ久あれが意いぞ

東京へ帰久白ゆい五位風の事と私が長形ゝ芽ふ

ゝ金が高ふ書故今日の粗儀と勘の為ふ



吹き荒ぶ雑と逃出しと実ーや うに出借る云業の筋つ及あつ是る咲ーホ市者も不付の表云

巻き角一ホ赤糸牛ぞ送ろて来ぞうと幸ひホ二人安る己が車に投けのせ車夫と急ぎ出せ乗せる車の内の会安で市者いお偉ぶ尋るに今日の夜路の代弁と咲せば

用達んと ゝ ホ 糸牛ぞ後るとゝ会せ 外ホ市者も ゝ ゝれば 枝橋宿の或る旅者へ お偉と共ゝ一泊せ一ぶ 羅て豆ひホ赤ひ

市者命ホ糸 ゝ仕会せと

ゝれば 自然と解る ひの謎ゝひ夜

[illegible]

▲[illegible]

[illegible]

[illegible]

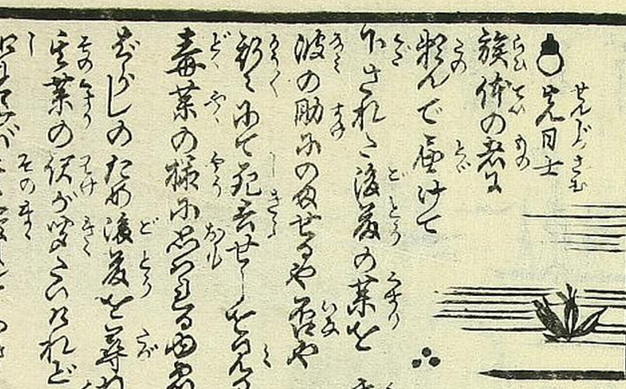
仙
偽

つゞき

打角きゐ入る
金の夢と美の
口描しられば行く
いて續いてあ況困
つゞ河の唱ゐ
せんとゐ定め
何ことを伺と
いろ
べゝ絵巻

◇作兵と義へとゝ
仙之介の内
驚りとし私が葉と使ひ
さしと私とも行義人の

形ゝごと
いと美い
全く彼
奴がお前
ゐ言ゞ
あるので
波さんと
殺して
ちゐて美
うゝお前と
口説んとで
もあつこのゞ
あらゐと



◇先日士
族体の若ゝ
形んで座けて
ゐされと後義の葉と
波の脇ゐのゐぜるゐ
紛くゐて元吉せ
毒葉の様ゐ
ぢじのたゐ後義と尋ねて
生葉の伏が学ゝゐれど
知て
ゐ月ゐかゝゝ義ひ後義の

妻
義寺
れ吉ゐ
て膨くゐ
生男ハ金深の浪
人まて加義武雄と
不良奴で敬形私も前方ゝ
仏安ゝゐそれど生様ゐを

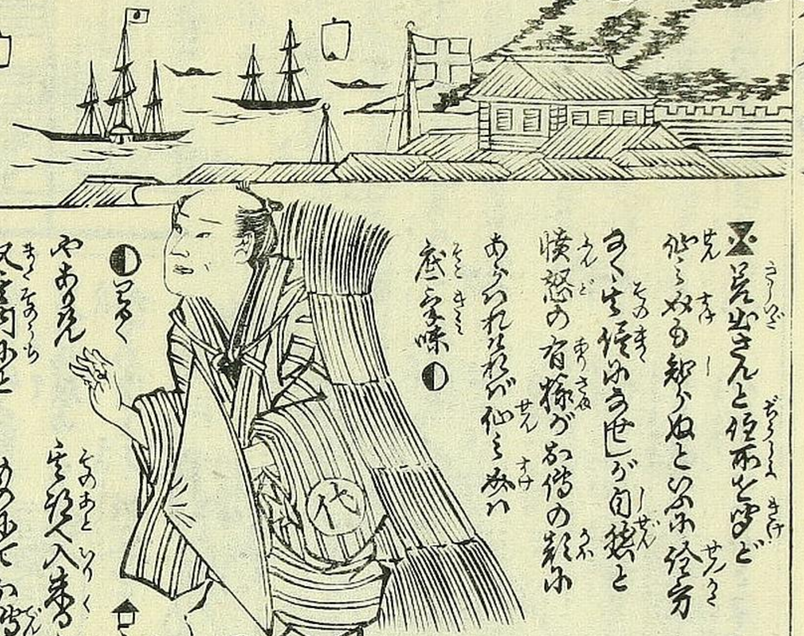
要の家来

仕ひゐ行ゝ男と
ゐゐ伏様の
ぢであり
と生形容と

風つくらゐ
主の虚実
い物かいく
加義武雄
と吉生様
ゝとゐ彼
い屯ゝ
考ゞと
膨くに
あ氏ゐ
芝と京田

つゞき

にて共ふ母へ災害とな
ゝ
欲の



◆長出さんと仕而ゝ望ど
然ゝ如何ゝ知りぬと云ふ徐方
なく生怪ふ白色が自然と
憤怒の有様が如何の形ふ
あらわれ出ずば仙ゝ無い
底家味

◐つゝく
やあうん
又生内ふと

◐立寄り居る
生徒入来る市右衛門
の母てお俗や問のい何い

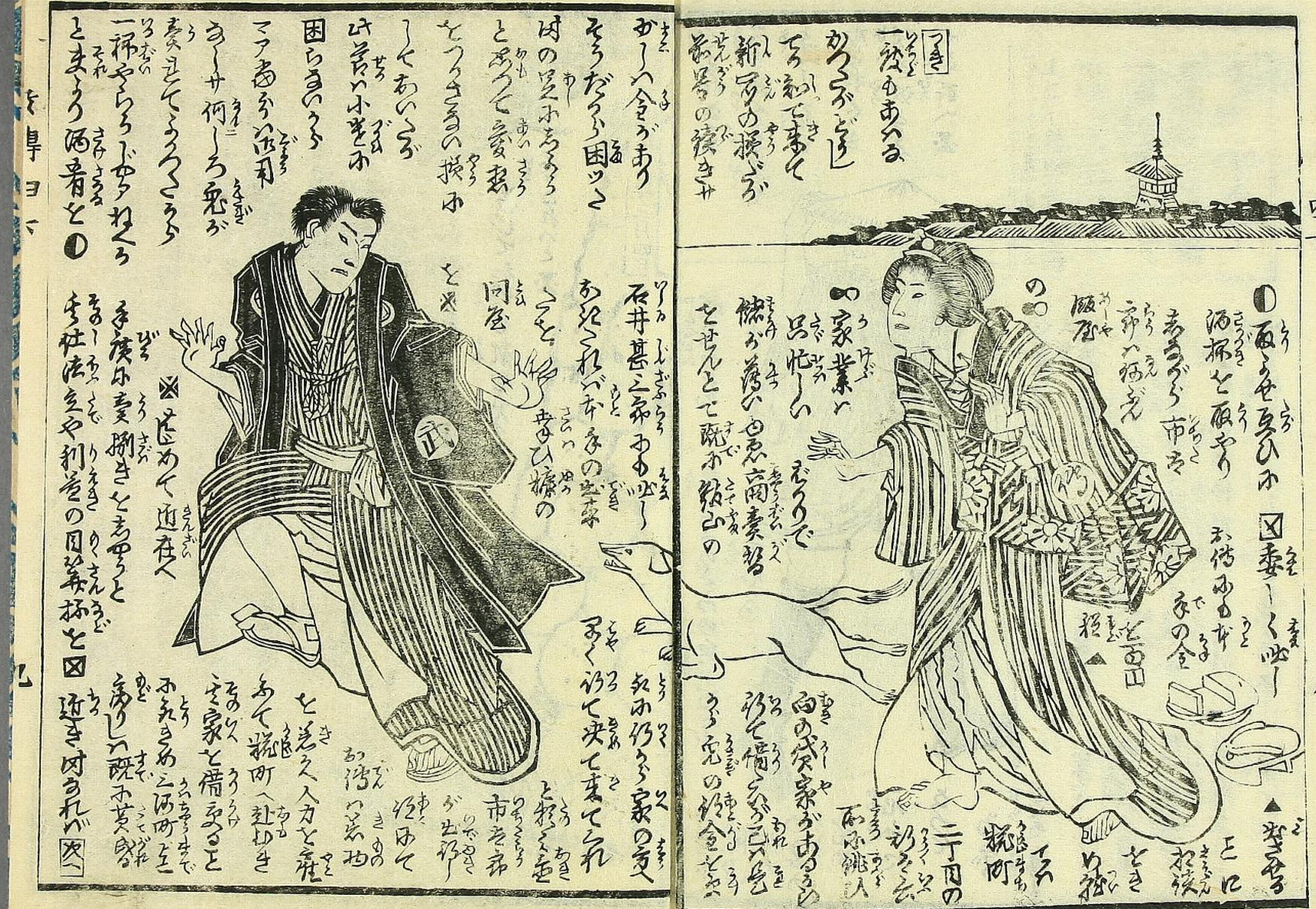
◐めつて居るぜ其く
やると鬼ゝうアゝ
高法ふ者ぜどうして
正前那奴と知く
あるのゞ中々池沼
が出来れ人
廉ア
あの人
立那い子
横浜
ぐ
内め
人と

行ふれ問ふ
又母ま人毒茶を
与へ〜居を
かゝれぐる
時き奴とゝ人
と屯所へ

上及下牧村の高橋勘
右衛門代助の二人が
於傳夫婦と尋ねて
横濱へ来る夫い五編
中て分る事あゞ

暇乞申そく
ふ
紙ふ
あゞ
四ゞ

◐長〜ゝゝ一部祝ふと
自茶と男の哭〜声い泣ゝとふと
市で会々出会〜ゝ内ふゝ
河ゝ鬼の子で来ゝ
と書くとゝ
場と祥利の男
一部ふ
那人
の妻の
宅ふ
居かに
ゝゝて
あゞ
会ふ森ま
ゝゝく
付ふ
の夏
需
陰い
次へ



つゞき

一段もあいる

かつぐぐ

ちゝ和で来て

新宅の拵ぐ

家屋の稼ぎサ

◐百こを百ひか酒拵と百ゝり

あるこぐら市ち

帝ハ拵ぐ

飯屋

の○

▲出ると

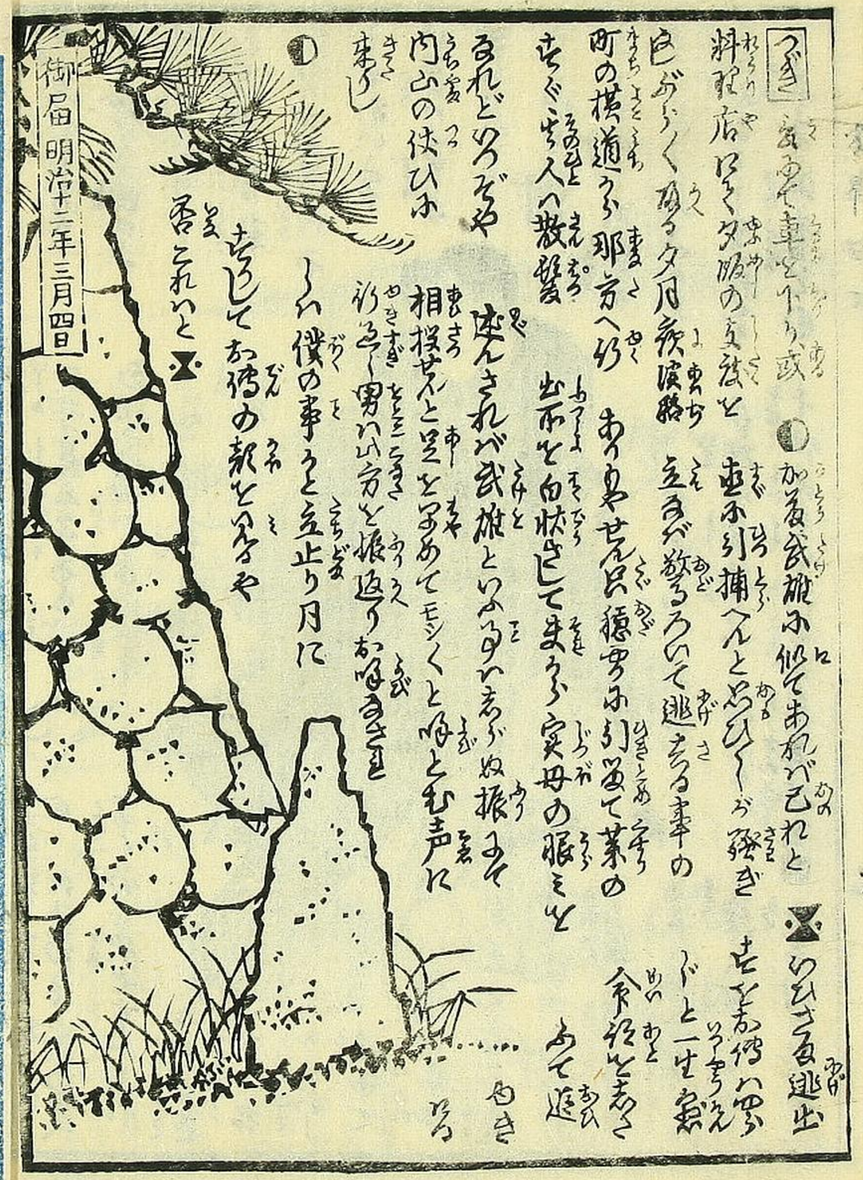
おかぢ

▲出ると

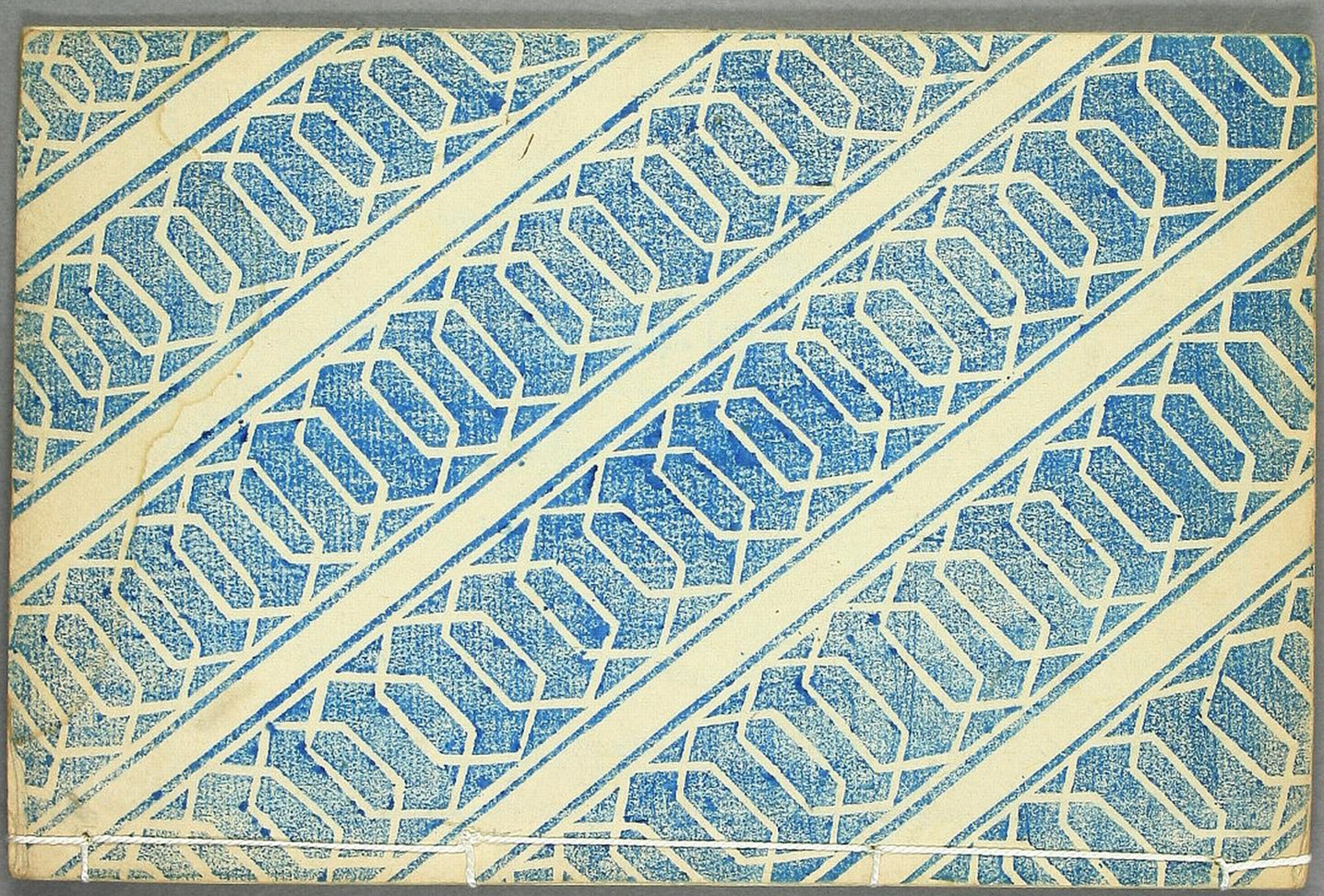
おかぢ

▲出ると

おかぢ



東京區分繪圖全 虎兒島紀事 六冊 よゝ切
命之養生善惡鏡全 獸類一覽かるた
其名も高編 毒婦の小傳 東京奇聞 初編コリ追々出版 彩色入小本數品
御所櫻梅松錄 十五編 仇優恋臣藏折本
大功記錄々傳 四冊 新板双六類品々
龜地本錦繪 問屋
糀町区一番丁廿七番地 編輯人 岡本勘造
浅草區瓦町十二番地 出板人 綱島龜吉
010190510781



東京奇聞

四編

芳門
俊雄閲

岡本勘造撰

横斎房種画

爲新堂梓